国労はかた

NO.161

2022.10.30

国鉄労働組合博多地区本部
責任者／穴井憲寿
編集者／教宣部
事務所/博多駅東2-18-28
ジェントリー博多201

国労九州本部レクレーション　肥前鹿島の旅

１０月２７、２８、２９日の３日間、九州本部主催のレク（佐賀県鹿島市日帰り観光）が開催され、博多地区本部からも多くの組合員が参加しました。まずは、武雄温泉駅に集合し、タクシーで鹿島市内へ移動。そして、日本三大稲荷の一つである**祐徳稲荷神社**に参拝し、その門前町にある食事処（家督屋）にて昼食。その後、肥前浜駅近くの**酒蔵通り**を散策し、最後は**「道の駅鹿島」**にてミニ水族館や買い物を楽しみ、武雄温泉駅へ移動後、解散しました。「特急かもめ」がなくなり、アクセス面でだいぶ不便になりましたが、魅力溢れる鹿島を是非多くの方に訪れて頂きたいものです。

青年のひとりごと

わが国では、大半の企業において、「ビジネスマナー」を身につけるための教育が行われていますが、私は以前から、この「マナー」を教育するということに対して疑問を抱いていました。確かに、「マナー」自体は、相手に不快感を与えず、かつ、印象を良くするために欠かせないものではあるのですが、これはあくまで、相手の視点に対する「想像力」を働かせられるか、という「知性」の問題であり、理詰めの教育によって即興的に身につけるものでありません。本来、ワークライフバランスのもと、人生を充実させていれば、その幸福度の高さから、自ずと他者目線で行動する余裕が生まれ、たとえそれが「形式」に沿ったものでなくとも、「好意」として相手には伝わるもの。そもそも、「企業」の第一の目的は、「利益」を上げることであるため、そこで教育される「マナー」というのは、利害関係を前提とした「処世術」としての意味合いが強く、これは裏を返せば、「自分に利益をもたらさない者を気遣う必要はない」ということでもあります。そこには、「仕事」をしている相手そのものに対する敬意はありません。実際のところ、どうでしょうか。日本人は、世界的にも、礼儀正しい民族であると言われていますが、多くの企業ではパワハラが蔓延し、精神疾患による休職や離職、さらには自殺の件数が異常なほど多いのは、誰もが知るところです。また、仕事をしていても、社会人経験が相当長いであろう乗客が、驚くほど稚拙な言動を取るのを度々目にします。彼らも当然、自分の職場では、上司に頭を下げるなど、礼儀正しく振る舞っているのかもしれませんが、会社から一歩外に出れば、後は何をしようと俺の自由だ、ということなのでしょう。労働条件が悪化する中、ハイレベルな「マナー」をマニュアル的に叩き込む、といった非人間的なシステムは、日本人に本来あるはずの「自発的」な「思いやり」まで封殺し、結果、裏表のある偽善的な人間を量産します。私たちが感じる「生きづらさ」の元凶はこうしたところにあるのかも知れません。

○当面する行動

○　１１月２日（水）１６：００～/部落解放共闘福岡県民会議幹事会　朝日ビル地下会議室
○　１１月３日（木）１４：００～/憲法フェスタin福岡　警固公園